

孫文とキリスト教

深澤秀男

はじめに

1. 孫文の生涯
 2. 孫文とキリスト教とのかかわり
 3. 孫文にとってのキリスト教の役割
- おわりに

はじめに

本小論においては、孫文とキリスト教の関係を考察する。考察の順序として、まず、孫文の生涯について述べ、ついで、孫文のキリスト教へのかかわり、孫文にとってのキリスト教の意味を追求して行きたい。

1. 孫文の生涯

孫文の「自伝」¹⁾等により、孫文の生涯について述べて行く。まず、「自伝」には、

僕の姓は孫、²⁾字は載之、号は逸仙であり、本籍は広東省広州府香山県にあり、1866年10月16日(旧暦)生まれている。幼くして、儒書を読み、12才で経学の修業を終えた。13才で母に従って、夏威夷島すなわちHawaiian Islandsに往き、始めて汽船の奇、青海原のひろさを見、これより、西学を慕う心、天地を窮める想いを持つようになった。この年、母は、また、中国に帰った。文は、ついに島に留まり、兄に依って、英国が監督し、掌る所の書院、Iolani College, Honoluluに入り、英文を学習した。三年後、再び、米国人が設立した書院 Oahu College Honoluluで学習した。これは、島中最高の書院であった。初め、ここで、卒業し、米国に往いて、大学に入り、専門の学問を学習しようと思った。後、兄は文が耶穌の道を切慕しているのので、キリスト教に進むのではないかと恐れて、親に督責させるため、中国に帰らせた、一八才の時であった。家に帰って後、親は督責する所がなく、その慕う所にまかせた。数箇月おり、香港に往き、再び英文を習う。³⁾

と見えており、1866年、広東省広州府香山県に生まれ、13才でハワイに渡り、イオラニ・カ

1) 国父全書編集委員会『国父全書』国防研究院、中華大典編印会 台北 1960 389頁
広東省社会科学院歴史研究所、中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室、中山大学歴史系孫中山研究室合編『孫中山全集』第1巻47-48頁 中華書局 北京 1981-1986

レッジ、オアフ・カレッジで英文を学んだが、キリスト教に傾いたので、兄の孫眉によって、18才の時、中国に帰らされたことまた、数箇月後、香港に英文を習いに行っていることが知られる。

ついで、「自伝」には、

まず、拔萃書室、Diaeison Home HongKongに入り、数箇月後、転じて、香港書院、Queen's Collegeに学んだ。また、数箇月で、家の事情により書院を離れ、再びハワイへ行き、数箇月して帰った。これより、英文を学習するのを停止して、復た、中国の経史の学を治めた。21才で、改めて西洋医学を学習し、先ず、広東省城の米国宣教師が設けた博濟医院、Canton Hospitalに入り、学習し、次の年、香港、新創の西医書院College of Medicine for Chinese HongKongに転入し、6年で、業を満たし、卒業試験で、優等生に拔擢された。時に、26才であった。以上が、先生に従って游学した大略である。⁴⁾

2) 孫文に触れた史料、参考文献の主なものに管見の限り、以下のものがある。

- 胡漢民編『総理全集』全5冊 民智書局 上海 1930
 国父全書編集委員会『国父全書』
 孫文著安藤彦太郎訳『三民主義』上下 岩波書店 1957
 中国国民党中央委員会党史委員会編『国父全集』全6冊 同党史委員会 台北 1973
 広東省社会科学院歴史研究所・中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室・中山大学歴史系孫中山研究室合編『孫中山全集』全11巻
 伊地智善継、山口一郎監修『孫文選集』1～3 社会思想社 1985～89年
 Timothy Richard: *Forty-Five Years in China*, New York, 1916.
 馮自由『革命逸史』全5冊 商務印書館 1946-47年
 宮崎龍介、小野川秀美編『宮崎滔天全集』全5巻 平凡社 1971
 広東省哲学社会科学研究所歴史研究室、中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室、中山大学歴史系合編『孫中山年譜』中華書局 1980
 陳錫祺主編『孫中山年譜長編』上・下 中華書局 1991
 K.S.Latouillete: *A History of Christian Mission in China*. London, 1929.
 鈴江言一『孫文伝』岩波書店 1950 (初版1931)
 高橋勇治『孫文』日本評論社 1944
 野沢豊『孫文』誠文堂新興社 1962
 野沢豊『孫文と中国革命』岩波書店 1966
 藤井昇三『孫文の研究——とくに民族主義理論の発展を中心として』勁草書房 1966
 貝塚茂樹『孫文と日本』講談社 1967
 横山英・中山義弘『孫文——人と思想』清水書院 1968
 小野川秀美編『孫文・毛沢東』中央公論社 1969
 堀川哲男『孫文』清水書院 1973
 彭澤周『近代中日関係研究論集』芸文印書館台北 1978
 堀川哲男『孫文』講談社 1983
 池田誠『孫文と中国革命』法律文化社 1983
 横山宏章『孫中山の革命と政治指導』研文出版 1987
 藤井昇三、横山宏章編『孫文と毛沢東の遺産』研文出版 1992
 王府民『孫中山詳伝』中国広播電視出版社 1993
 藤村久雄『革命家孫文』中央公論社 1994
 山根幸夫『近代中国の中の日本人』研文出版 1994
 イスラエル・エプシュタイン著久保田博子訳『宋慶齡——中国の良心・その全生涯』上・下 サイマル出版会 1995
 中村哲夫『孫文の経済学説試論』法律文化社 1999
 深澤秀男『変法から革命へ』(『中国近現代史論集——菊池貴晴先生追悼記念論集』所収) 汲古書院 1985
 深澤秀男『中国の近代化とキリスト教——特に現代のキリスト教との比較で』『フィロソフィア・イワテ』23 1991
 深澤秀男『中国の近代化とキリスト教——その要約』(『岩手大学人文社会科学部——市民大学セミナー——自然・人間・文化』所収) 岩手大学人文社会科学部 1999

3) 1) と同じ

4) 1) と同じ

と述べられており、まず、拔萃書室、Daeison Homeに入り、ついで、香港書院、Queen's Collegeに入学し、21才で、広東の博濟医院、Canton Hospitalに入り、次の年、香港の西医書院、College of Medicine for Chinese HongKongに転入し、6年で卒業し、優等生となったことが知られる。

なお、「自伝」には書かれていないが、拔萃書室に入学したあと、『革命逸史』によれば、後に精しく述べるように受洗している。⁹⁾

さらに、「自伝」に

文は、若くして、志は、遠大を窺い、性は新奇を慕った。だから、学ぶ所は多く博雑で、不純である。中学では、独り、三代兩漢の文を好み、西学では、ダーウィンDarwinismの道と格致、政事にはなほだ癖し、常に、ざっと目を通してゐる。宗教では、耶穌を崇め、人については、中国の湯王、勇氣については、米国のワシントンに仰いでゐる。⁵⁾

と見え、志は遠大を窺い、中学では三代兩漢の文、西学ではダーウィニズム、格致、政治に目を通してあり、宗教では、耶穌を崇め、中国の湯王、米国のワシントンに仰いでゐることが知られる。以上で、「自伝」を終えている。

以後、年譜風に孫文の生涯を見て行くこととする。

1884年5月には、同県の盧耀頭（カトリック）の娘、盧慕貞と結婚した。'91年10月には、長男孫科が生まれている。

1893年には、鄭士良、陸皓東、尤列、陳少白等と「興中会」を創設している。

1894年には、變法的な内容で、李鴻章に上書している。⁶⁾

1895年には、初めての起義、広州起義を起こし、失敗し、日本に亡命している。

1896年には、ロンドンで、中国公使館に監禁され、恩師、カントリーなどの盡力で救出されている。

1897年、宮崎滔天ら、日本の志士と交わっている。

1905年、東京で、中国同盟会を組織し、つづいて、『民報』を創刊し、⁷⁾三民主義、五権憲法を唱えている。

1911年、武昌蜂起により、辛亥革命が成功した。

1912年、孫文は、中華民國臨時大總統に選ばれ、共和制を開始した。

1913年、袁世凱の独裁に反対して、第二革命を起こしたが失敗し、日本に亡命した。

1915年、東京で、秘書の宋慶齡と再婚した。

1916年、護国軍の蔡鍔等により、第三革命が成功し、袁世凱が死んだ。

1917年、第1次広東軍事政府を組織し、大元帥に就任した。

1919年、『孫文学説』（心理建設）を出版し、中華革命党を中国国民党と改称した。

1921年、第二次広東軍事政府の非常大總統に選出され、就任した。

1922年、陳炯明のクーデターで上海に移る。

1923年、ヨッフエと共同宣言を行い、中国国民党の改組宣言を行う。

9) 馮自由『革命逸史』第2冊 11頁

5) 1)と同じ

6) 拙論「變法から革命へ」142-143頁

7) 同前 148-150頁

1924年、中国国民党の第1回全国代表大会を行い、連ソ、容共、農工扶助の新三民主義政策を取り、三民主義の講演を行い、日本で大アジア主義の講演を行う。

1925年、肝臓ガンで死去。

以上が、孫文の生涯のあらましである。すなわち、「自伝」により、彼が、1866年広東省香山県で生まれ、ハワイ、香港、広州で学び、受洗し、医師となったことを明らかにした。それ以後の彼の生涯は年譜風に書いた。主なものとしては、興中会、同盟会の創設、ロンドン遭難、辛亥革命による臨時大總統就任、新三民主義の提唱、病死などである。

2. 孫文とキリスト教とのかかわり

孫文とキリスト教とのかかわりについて述べて行く。

宮崎滔天によれば、孫文は、太平天国の老兵の話を聞いて育ったという。すなわち、『宮崎滔天全集』第一巻に、

語ニ曰ク、「龍ハ二寸ニシテ氣ヲ呑ム」ト。逸仙三尺ノ童子ニシテ、英氣横溢、膽量拔群、乃チ敗殘ノ諸老雄深く其器ヲ愛シ、左手ニ白髯ヲ掀シ、右手ニ其頭ヲ撫シ、諄々トシテ當年ノ戰狀ヲ語り、洪氏ノ風貌ヲ談ジ、興至レバ手ヲ舉ゲ煽シテ曰ク、「汝能ク第二ノ洪秀全タルベシ」ト。彼亦心私ニ之ヲ以テ任ジ、閑アレバ則チ模擬戰爭ヲ行イ、宿老ノ革命談ヲ聞クヲ以テ無上ノ樂トナシタルガ故ニ、終ニハ人ノ逸仙ト云フモノナク、皆洪秀全ヲ以テ彼ヲ呼稱スルニ至レリト云フ。⁸⁾

と見え、洪秀全の話聞き、自も洪秀全たらんとした様子がかがわれる。

孫文の受洗のことについては、『革命逸史』の「孫總理信奉耶穌教之經過」（以下「経過」と略称）に

總理既に香港に至り、初め、拔萃書院で学んだが、放課後、恒に、ロンドン会長老の区鳳墀の国文の補習に従い、また米国宣教師喜嘉理博士と知り会った。喜牧師は、来華して、伝道を多年行い、広東の各県に遍く足跡があり、總理を知って久しくなかったが、總理が、基督の真理の面に服従しており、まだ受洗していないのを知り、ついに總理に一日も早く受洗してキリスト教を奉じて人々にも唱えることを力めて勧めた。總理はこれに従い、数箇月後、果たして、好友陸皓東とともに綱紀慎会禮拜堂で受洗し、總理は日新と署名し、皓東は中柱と署名し、受洗を施したのは、喜嘉理牧師だった。⁹⁾

と見えており、拔萃書院で学んでいた時、後にベルリン大学の教授となる、長老の区鳳墀に国文を学び、アメリカの組合派のミッションボードの宣教師、チャールズ・ハージャーから、陸皓東と共に受洗していることが知られる。

もっとも、その師友・区鳳墀のすすめで、その後、逸仙と名前を改め、ハージャー牧師の紹介で、博濟医院に入学している。¹⁰⁾

8) 宮崎龍介、小野川秀美編『宮崎滔天全集』第1巻 478頁

9) 馮自由『革命逸史』第2冊 11頁

10) 同前

1884年、兄からハワイに来るように言われ、ハワイに行った所、兄から神像を蔑して、類を父に及ぼしたことを痛責されたが、孫文の志は変わらず、芙門諦文牧師の援助で、帰国している。¹¹⁾

学を求めて医学校に行くことに及んで、先後して基督教の同志と知り合っている。そのことについて、「経過」では、

帰国して学を求めて医学校に行くに及んで、先後して、基督教の同志と知り合った。区鳳墀、鄭士良、楊襄甫、陳少白、何啓、左斗山、王質甫の諸人がいた。乙未（1895年）九月広州の役に大いにその力を得た。その役に失敗の後、海外の各地を奔走し、恒に教友の助けを得た。日本横浜に在っては、張果、趙明、樂趙嶧、琴菅源伝（日本人）等が有り、米国には司徒南達、黄旭昇、毛文明、伍盤照、伍于衍、鄧幹隆、鄭華汰、黄鄭泉等が有り、シンガポールには、林文慶、黄康衢、鄭聘廷等があり、皆キリスト信徒の誼により、先後に総理に盡力した者たちである。¹²⁾

と述べられており、香港・広東の区鳳墀、鄭士良、陳少白、何啓などのキリスト教徒の友人、横浜、米国、シンガポールにも同信の友人がいたことが知られる。

また、これらの友人と中国の革新を計画して行くことになるが、そのことについて、ハージャーは次のように云っている。

まさに、この時、先生は、中国の亟^スやかで適切な革新を倡言し始め、密かに革新の計画をはかり、実行し、中国の牧師とその同道の者は、先生の緒論を聞き、皆、秘かにこれに与かり会合し、共に進行を謀かった。それから、今日に至るまで、すでに二十年になる。¹³⁾

と見えており、これらの同信の牧師、友人達の協力により、孫文の革命の計画が実行に移されて行ったことが知られる。

その中で、興中会が創設され、広州起義が起こされたが、広州起義についてハージャーにより以下のように述べられている。

この数箇月後、広州に義旗を挙げることを謀ったが、機密が露見し、革命の志士たちは東西に逃亡し、先生は幸いにも虎口を脱したが、キリスト者で連坐して、殺された者が何人か出た。¹⁴⁾

と述べられており、広州起義でキリスト者の犠牲者が出たことが知られる。

また、その後、ロンドンで遭難脱出後、師友区鳳墀に手紙を出しているが、馮自由はそのことに触れ『革命逸史』でつぎのように述べている。すなわち

「この時、心臓が痛み、悔い懇切に祈祷するのみであった。六、七日連続、日夜絶えず祈

11) 同前

12) 同前11-12頁

13) 同前15頁

14) 同前

り、いよいよ祈り、いよいよ切実であった。第七日になると、心中忽然として安んじ、全く憂いがなくなった。期せずして、その通りで、自分が云った反応があり、神の恩を蒙った」などの語があった。ここに、総理のキリストの真理を信奉する一面を見ることが出来る。¹⁵⁾

と見えており、ロンドンの災難を祈祷によって乗り切った様子が知られる。

ついで、王府民の『孫文詳伝』によれば、1903年、ハワイのHiloの興中会の組織の恢復に着手したが、興中会員で、その地の教堂の宣教師が応援してくれたことが述べられている。¹⁶⁾

また、同年、米国に入国しようとして17日間、拘留された時、キリスト教学者の伍益照に助けられている。¹⁷⁾

1910年5月、孫文がホノルルを離れる時、かつて、孫文が兄と対立して帰国した時、旅費を援助してくれた。美蘭諦文牧師を主席として、華僑達が盛大な歓送会を開いている。¹⁸⁾

1912年2月、孫文は内務、教育部より各省への通告として、各種の迷信祭祀の廃止を明らかにしている。¹⁹⁾

1912年3月、袁世凱が大總統名で公布した『中華民国臨時約法』にもその第2章第6条にも第6条、人民は左列各項の自由権を享け得る。：主要なものは、人身、居住、財産、言論、通信、信仰の自由であり、欧米の憲法と同じである。²⁰⁾

と見え、信仰の自由が表されているのが知られる。

1912年5月の広州耶蘇教聯合会での歓迎会で孫文はつぎのように演説している。すなわち

兄弟、今日帰って来て、なつかしい以前学んだ地に、牧師、兄弟姉妹と一堂に集まることは、誠に夢想も及ばない所です。ともに医学に従事した親友を思い出し、復た会える、その喜びと感激は言葉に表し難いものがあります。今、幸いにも民国が成立し、暗黒を掃除し異種を駆逐しました。今日から半年前に遡ると其の境地には、大いに天地の差があります。けだし、以前は専制が束縛し、今は自由を恢復しています。我が兄弟姉妹、教会については、信徒の為にあり、国家については、国民の為にあります。専制国の政治は上にあり、共和国の政治は民にこそあるのです。将来の国家政治の得失、前途の安危、結果の良否は、皆これ我が国民に頼るところです。どうして、清時代の奴隷の自居は、根本的にそれを放棄することに及ぶことがありましようか。また、清の教会においては、自由信仰、自立宣教が不可能であり、只条約の保護を借りるのみでした。今、完全に独立し、自由信仰です。キリスト教徒たる者は、まさにキリスト教理を發揚すべきですし、同じく国家の責任を負い、政治、宗教をして、ともに立派な目的に達せしむるべきです。兄弟、帳触旧懐して、百感もごも集まり、一、二言では尽すことができません。望むらくは、今後とも勉力前進して、一諸に責任を担い、宗教の幸福を享受できることを。兄弟のために祈る者です。²¹⁾

15) 同前12頁

16) 王府民『孫文詳伝』193頁

17) 同前206頁

18) 同前484頁

19) 《臨時政府公報》第32号

20) 《中華民国臨時約法》南京臨時參議院1912

21) 広東省社会科学院歴史学研究所等編『孫中山全集』第2巻 360-361頁

と述べられており、かつて学んだ地に帰り、キリスト者たちの友人、医者の子友たちに出会い、言葉には出せないような感激をしている様子が知られる。また、キリスト教徒は、キリスト教教理の発揚に勉め、国家の責任を負い、政治、宗教をして、その立派な目的にともに達すべきであることを説いている。

1812年9月には、北京の基督教等六つの教会の歓迎会で演説している。すなわち、牧師、教友に対して、革命に協力してくれたことに感謝し、教会の果たすべき役割について述べているが、あとで精しく触れて見たい。²²⁾

1912年9月には、青島で、中華基督教青年会の歓迎会に出席している。²³⁾

1914年には、上海のフランスのカトリック教会の歓迎会で演説し、西方の宣教師の役割と宗教と政治の関係について述べているが、²⁴⁾後述したい。

1913年3月には、長崎に行き、基督教青年会と基督教世界和平会の連合歓迎会に出席している。²⁵⁾

1915年10月26日には、孫文は、梅屋庄吉夫妻の世話で秘書の宋慶齡と再婚している。場所は、東京であり、和田瑞弁護士が証人となり、誓約したものである。孫文は、宋慶齡に誓約書を与えているが、その第2条では、将来永遠に夫婦関係を保ち、共同して、相互の幸福を増進するよう努力することを誓約しているのが知られる。²⁶⁾

孫文と宋慶齡が結婚したことにより、盧慕貞夫人は、澳門に帰り、基督教に加入し、寄託した便りによると彼女は、入教後、篤信に至ったと言われている。²⁷⁾

1923年1月、孫文は、中国国民党の改組宣言を出し、その中で、信仰の絶対自由権を認めている。²⁸⁾

1923年7月、孫文は、国民党の徐謙が、国民党の総統に専念しないで、国会議員にもなろうとした時、孫文は、そのことを諫めて、キリスト者として醒めて、徹底して革命に従事して欲しい旨を述べている。²⁹⁾

1923年10月には、広州の全国基督教青年会連合会で「国民は人格を以て国を救うべし」という題で特別講演を行い、キリスト者が国民の健全育成をするよう訴えている。³⁰⁾

1925年、孫文が死ぬ頃、孫文はキリスト教式の葬式をして欲しい旨、宋慶齡やクリスチャンの高官に頼んでいたと、ラトウレットは述べている。³¹⁾

以上、孫文とキリスト教とのかかわりについて見て来たが、子供の頃、太平天国の老兵の話聞いて育ち、19才で香港で、アメリカ組合派宣教師ハージャーから受洗し、キリスト者の友人を与えられ、共に革命を語り、クリスチャン達の支持と援助のもとに辛亥革命の実行に至っている。民国後は、教会などの歓迎会に出席している。

22) 同前446-467頁

23) 王府民『孫文詳伝』709頁

24) 国父全書編集委員会『国父全書』565頁

25) 王府民『孫文詳伝』755頁

26) 広東省社会科学院歴史学研究所等編『孫中山全集』第3巻199頁
イスラエル・エブシュタイン著久保田博子訳『宋慶齡』64-67頁

27) 王府民『孫文詳伝』821頁

28) 中国国民党中央委員会党史委員会編『国父全集』一、857-860頁

29) 同前三、917-918頁

30) 王府民『孫文詳伝』1074頁

31) *Latoulette: A History of Christian Mission in China*, p703

3. 孫文にとってのキリスト教の役割

孫文にとってのキリスト教の役割は、キリスト教が中華民国創設のエネルギーとなり、その背景には、すでに見て来たように多くのクリスチアンの存在があったことが知られるが、それらのことを含めて、さらに精しく、孫文にとってのキリスト教の役割を孫文、その他の人々の評価を通して明らかにして行く。

まず、孫文から見て行く。孫文は、1912年4月、前総統府の秘書李暁生に、宋慶齡の父宋嘉澍との交際について手紙を書いているが、その中につきのように見える。すなわち、

宋嘉澍君は、20年前、陳皓東烈士と弟（孫文）がはじめて革命を談じた者である。20年来、始終不変であり、世に知られることを求めないとしても、上海の革命がこのような好結果を得たのも、彼の力がなかったとは言えない。彼は、教会と実業に従事していたが、隠れては、革命の道を伝えており、世の隠君子である。弟が、今職を解かれて上海に来て、再び本人に会うことができ、かつて、陸皓東と三人で、しばしば、一晚中談じたことに感慨を禁じ得ない。今、宋君は、弟を留めて、その家に住まわせ、旧を話し、陸皓東のことを追思できたのである。³²⁾

と述べられており、宋嘉澍が、キリスト教を伝えながら隠れて革命の道を伝えていたこと、孫文や陸皓東と共に談じ合っていたこと、広州起義で烈士となったキリスト者陸皓東のことを思い出しているのが知られる。

既に見たように、孫文は、1912年の広州耶蘇教聯合会の歓迎会の演説で、民国後のキリスト者の役割として、キリスト教の教理の発揚と国家の責任を負い、政治のあるべき目的の達成に参与すべきことを述べていることが注目される。³³⁾

また、同年9月の北京のキリスト教等六つの教会の歓迎会の演説の精しい内容は以下の通りである。すなわち、

今日、各大教会の牧師先生及び多くの教友の開会、歓迎を蒙り、＜兄＞弟は、まことに恐れ入ります。兼ねて、このたびの革命の成功について申しますと、恥じ恐れることが多いです。但、わたしが数年前、革命を提唱し、奔走呼号しましたが、始終変わらず革命が真理であることを知ったのは、大半が教会より得た所のものです。今日中華民国が成立したのは、私の力ではなく、教会の功です。しかし、民国が完成し、自由平等、万衆一体、信教の自由もまた約法の保障する所であります。ただ、宗教と政治は連帯の関係にあります。国家の政治の進行は、その及ばざる所を宗教が補助してくれることに全く頼っています。けだし、宗教の富は道德の故です。私は、大衆が宗教上の道德をもって、政治の及ばざる所を補うことを希望します。そうすれば、中華民国は万年強国になり、私の幸いであるばかりでなく、衆くの教友の福であり四億の同胞の受ける賜物も良くて多いでしょう。³⁴⁾

と述べられており、国家の政治の及ばざる所を宗教上の道德をもって補って欲しい旨の発言をしていることが知られる。

32) 王府民『孫文詳伝』678-679頁

33) 21) に同じ

34) 広東省社会科学院歴史研究所等編『孫中山全集』第2巻446-447頁

ついで、1914年の上海におけるフランスのカトリック教会の歓迎会では、「宗教と政治之關係」と題して、つぎのような講演を行っている。すなわち、

僕は、今日、貴主教及び各教士、学生等とお会いでき、大変感謝して居ります。私は、万難を排し、萬死を冒して革命を行い、今日幸いにも祖国を光復することができました。その遠因を推せば、皆外国の觀感によるのであり、欧米文明に漸染し、世界の新理を輸入し、風気が日に開け、民智が日に闢け、ついに、悪劣な異民族の政府を推し倒すに至ったのも、この觀感に由来していないものはありません。そして、この觀感は教会の教士、宣教師の多くに力を得ているのであって、僕1人が当さに感謝すべき所ではなく、我が4億の同胞が皆当さに感謝すべき所です。

民国が成立し、政綱を宣布しました。信仰の自由は、もとより昔日の満清時代の民教の衝突を消除しましたが、凡そ、国家政府の及ぶことのできない所を、幸いにも宗教が、それを救援すれば、民の道徳は自ら上理に至るでしょう。世上の宗教は甚だ多く、野蛮の宗教と文明の宗教があります。我が国は、偶像が地に遍く、異端が尚盛んで、まだ、一律に一尊の宗教を崇めることができません。今、幸いにも西方の教士が先覚となり、吾が国を開き導いてくれました。ここで、願うことは、将来、全国の皆さんが至尊、全能の宗教をつつしんで崇め、民国の政令の逮ばない所を補っていただくことです。願はくは、国政が改良し、宗教も亦、漸く改良し、務めて政治と宗教が相互に提携し、中外の人民がいよいよ親睦されんことを。僕、今、ここに在って、諸君と相会し、さらに願うことは、諸君がともに愛国心を発し、民国に対して各人がその応さに負うべき責任を盡すことであり、厚く望みます。³⁵⁾

と述べられており、欧米文明とキリスト教の中国流入による中国文化の発展と宗教が民国の政令の逮ばない所を補って欲しいと願っていることが知られる。

ついで、孫文に洗礼を授けた、ハージャー宣教師は、孫文のキリスト教について、つぎのように言っている。すなわち、

先生はすでに身を信道につなぎ、熱心に基督の証しをし、幾ばくもなく、その友人二人が感動して、虚心に教えを奉じた。……しかし、先生の熱心と毅力はついに能く、その友人を導いたが、信仰の途より出なければできなかったことであり、その魄力の広さ、人を感じさせる深さには、そのはじまりを見ることができる。彼の僑居している海外の七百万の華人が皆、その排滿の主張に同情を表したのも因なしとしない。即ちかの同教の信徒も外界の牽制でその運動を顕かに援助することはできなかったとはいえ、すでに心のうちでは相印していたのである。嗚呼、中国が能く専制政体から一変して民主政体となったのも、その感動力が偉大でなければ、済うことができようか。……³⁶⁾

と述べており、彼の信仰の熱心さ、感動力の偉大さにより、キリスト教徒が孫文の民主政体を支持していたと考えていたことが知られる。

孫文の恩師カントリー博士によれば、

35) 国父全書編集委員会編『国父全書』565頁、なお王府民氏は1912年としておられるが、ここでは、『国父全書』に従った。

36) 馮自由『革命逸史』第二集14頁によった。

一種の解釈できない潜在力と一種の抗拒できない感召力があり、人々を彼と同じ道に吸引した。まさに別人と同じように同一の理由で頭を投げ出し、熱血を散らすことを惜しまなかった。これは、生まれつきの性質であり、信・望・愛の三徳を用いて、これを概括できよう。彼の心の中には、一種の堅定的な信仰があり、中国の早期の復興から人民を愛護することに及んでいる。愛徳—真正の愛徳は孫文の顕著な特性である。彼の心には、不仁の思想はなく、口には、仁愛でない言語は絶えて無い。彼の一言、一行は、処々すべて他人の着想である。彼の大公は私がなく、現代人の夢にも及ばない所である。……彼の秘密は無我の精神である。ただ、国家の利益を謀って個人の栄達は図らず、彼の確かさは、一人の大公無私であり、栄利を慕わない愛国者であり、出处進退に論なく、国家の需求を前提としないことはなかった。³⁷⁾

と述べており、孫文が信・望・愛の三徳を生まれながらに持っており、吸引力があり、本人は、大公無私の人物であったとしている。また、中国の復興と人民を援護していたとも言われている。

ついで、孫文の同志の一人、馮自由の評価を見ておく。彼の『革命逸史』によれば、

総理の信教を考えれば、完全にキリスト教の救世の宗旨を出ていた。その信奉する教義は進歩的であり、革新的であり、世俗の旧制度、思想を墨守する陳腐な人たちとは明らかに同じではなかった。私は、日本及び米国にあって、総理と多年一緒にいたが、基督教会において、革命を講演する時を除いて、それ以外では、足跡は礼拝堂に一步を入れていない。中西の教士との宗教問題の討論で聞くと、総理の議論は風発し、恒に新旧宗派の歴史及び経典を列挙し、詳微博引、異常に透徹していた。聞く者は均しくこれを難しいとはしなかった。また、総理の宗教に対する学識の淵博さは、常人の及ばない所のように見えた。また、総理は、自ら革命を倡導して以来、設けた所の興中会、同盟会、中華革命党等の団体の誓約では、等しく天発の誓字の様をなしており、一種の宗教宣誓的な儀式であり、基督教の受洗の例から脱胎したものである。³⁸⁾

と述べられており、孫文のキリスト教は革新的であり、礼拝にはあまり出席しなかったが、キリスト教や宗教のことは良く知っており、興中会等の入会式もキリスト教の受洗の式を脱胎したものであるとしている。

孫文の革命運動に身を捧げた宮崎滔天は、つぎのように言っている。すなわち、

敢て多く言ふに及ばぬ。彼は自由平等博愛の甲冑をつけた革命の化身である。彼が幼年時代に捉へ得たる耶蘇教の信仰は、その少壮時代よりして間断なく修養し來った政理及び哲学と混和して、茲に一種の哲学を形成し、其哲学と孫逸仙とが一体となりて、現在の革命的戦士孫逸仙を顕出したのである。即ち天は人の上に人を作らずてふ確信に根底を置き、人類同胞主義に拠って天国を地上に建設せんとする者である。³⁹⁾

37) 王府民『孫文詳伝』791-792頁によった。

38) 馮自由『革命逸史』第二集12頁

39) 宮崎龍介、小野川秀美編『宮崎滔天全集』第一巻427頁

と述べられており、キリスト教と政理及び哲学が、孫文の中で混然一体となり、革命的戦士、孫文が生まれたとしていることが知られる。

日本人で、政治的な立場からも孫文を応援した犬養毅の評価を彭沢周氏の所説によりまとめれば、第1に誠実で嘘を言わない言行一致の人物である。第二に自己の学説を信じており、共和主義を提唱し、平等の旗幟を樹立した。これは、誰であっても動かすことはできないし、億万円でも彼から買うことのできないものである。彼のこのような人格は、宗教信仰上より可能であり、この種の偉大な人格は、無数の人心の威力を包み込む。第3に清廉節儉で金銭を愛さないとされている。⁴⁰⁾

これからすれば、犬養にとっては、孫文が言行一致の平等の旗幟を樹立した、無数の人達を包み込む宗教信仰的な偉大な人格であり、清廉節儉であったとしていることが知られる。

孫文の妻となった宋慶齡の孫文についての評価を、エプスタインの『宋慶齡』によって見れば、

宣教師たちの干渉の結果として、改宗によってクリスチャンになっていた孫も、クリスチャン家庭に生まれた慶齡も、再びどの教会の会員にもならなかったし、それを望むこともなかった。二人ともキリスト教教育で身につけた道徳観念をもちつづけたことは疑いない。彼らには相変わらず（宣教師を含む）多くのクリスチャンの友人、革命への同情者がいた。しかし、夫妻は神学からは離れた。

慶齡の述懐によると、壮年になった孫文は、「どんな神もけって信じませんでした。彼は宣教師たちを信頼していませんでした。……私が彼に、アメリカでの学校生活について語った時のことです。日曜日には私たちは全員教会に連れていかれたものですが、その時に私はクロゼットに入り、衣服のうしろに身を隠し、学友たちや寮母たちが立ち去ったあと出てきて、故郷に手紙を書いたものです、と話しますと、彼はおなかの底から笑い、『それじゃ、私たち二人とも地獄に行くことになりますね』と言いました」。⁴¹⁾

と述べられており、宋慶齡の述懐によれば、壮年になった孫文は信仰から離れていたことが伺われる。

英国バプテリスト派宣教師で変法派と関係が深く孫文とも交渉のあった、ティモシー・リチャードは、その自伝“*Forty-Five Years in China*”で、1900年孫文を訪問した時のことをつぎのように言っている。すなわち、

その時、孫文は清朝打倒のテーマに没頭し、大量虐殺のおどしにより満人を追い出すまでは、その方法を絶対に変えないというのであり、彼は明らかに純粹に單純に革命を主張することを決意した。私は、孫文に対して、政府を文書によって啓蒙するに限ると思っており、そのためには是非共同して働かなければならないと答えた。⁴²⁾

と見えており、孫文の革命運動に対し、啓蒙運動をすすめ、共同して働こうとしているのが

40) 彭澤周『近代中日関係研究論集』323-324頁

41) イスラエル・エプシュタイン著久保田博子訳『宋慶齡』上68頁

42) *Timothy Richard: Forty-Five Years in China*, P.35

深澤秀男『戊戌変法運動史研究』上262-263頁

知られる。

“*History of Christian Mission in China*”の著者ラトウレットは、つぎのように述べている。すなわち、

革命派は、特に宣教師とその改心者に友好的であった。教会との関係において、プロテスタント・クリスチャン達は、変革への希望を吸収し、彼らの同情は、いつも新体制であった。革命派の中心人物達は、クリスチャンであり、キリスト教に友好的であった。孫逸仙は、その他の共和国への責任あるリーダー達よりも共和主義者のアイドルであり、臨時大総統であり、我々が知っているように、彼は教育の多くをホノルルのプロテスタント達の手で受けており、クリスチャンとして知られ、1884年受洗し、香港のアメリカン・ボード・ミッションの建物で生活していたのであった。多くのプロテスタント・クリスチャンは、新政府、特に広東に、積極的であった。⁴³⁾

と見えており、革命派は、宣教師や改心者と友好的であり、その中心人物は孫文であったとしていることが知られる。

野澤豊氏はその著『孫文』で

孫文の革命運動は、クリスチャンとしての結びつきのなかに発酵し、その反体制的な傾向を集約しつつ、勢力を拡大していったものと見られる。⁴⁴⁾

と述べておられ、孫文の革命運動とクリスチャンの結びつきの深さについて言及されているのが知られる。

山根幸夫氏はその著『近代中国のなかの日本人』で

このような他人への信頼感と同時に権力の不義不正を絶対に許さない彼の正義観、これこそが孫文をして生涯変わることなく革命の途へ立ち向わせた原動力であり、その根底には揺がぬキリスト教信仰があったと思われる。⁴⁵⁾

と延べておられ、孫文の革命運動の原動力としてのキリスト教信仰を明らかにしておられる。

以上、孫文にとってのキリスト教の役割について、孫文、宋慶齡をはじめ7人の諸先学の評価を見て来たが、それらによれば、キリスト教が孫文の革命運動の心の支えとなり、革命運動には、多くのキリスト者の支持と援助があったということである。

筆者としては、端的に言って、孫文にとってキリスト教がなければ、その革命運動は更に困難を極め、多くの犠牲、財力、日時を必要としただろうと考えられる。

その点、当時の社会情勢や非キリスト者の支持と援助とあいまって、孫文がクリスチャンとなり、内外の多くのキリスト者の支持や援助があって、初めて辛亥革命等が実行できたと言えるであろう。

43) Latoulette: *History of Mission in China*, p.609

44) 野澤豊『孫文』29頁

45) 山根幸夫『近代中国の中の日本人』87頁

46) 中村哲夫『孫文の経済学説試論』15～19頁

また、孫文のキリスト教は、どちらかと言えば社会的キリスト教であり、キリスト教と社会変革が結びついており、受洗から辛亥革命の頃までが信仰的にも最も高揚していた時期だったのではなかろうか。⁴⁶⁾

さらに、民国以後の孫文は、キリスト教の役割を政治の及ばない所を補完する道徳的なものとして把握していたと思われる。

おわりに

以上、孫文の生涯、キリスト教とのかかわり、孫文にとってのキリスト教の役割について考察した。

まず、孫文の「自伝」により、医師になるまでの生涯をたどり、それ以後は、年譜風に同盟会の創設、中華民国臨時大総統就任などを明らかにした。

キリスト教とのかかわりで言えば、受洗後、クリスチャンの友人達の与えられ、彼らの支持と援助のもとに中華民国を創設し、民国以後は、教会、YMCAなどの歓迎会に出席している。

孫文にとってのキリスト教の役割では、まず、孫文、宋慶齡をはじめとする8人の諸先学の評価を見て来たが、孫文の革命運動には多くのキリスト者の支持と援助があったことを明らかにした。

筆者としては、孫文のキリスト教は、社会変革と結びついた社会的キリスト教であり、民国以後は、孫文がキリスト教を道徳的にとらえていたことを明らかにした。